

発展教養科目「国際理解」・「地域理解」の実践報告

— 大変だけど、おもしろく、ためになる授業をめざして —

中上 健二*

Abstract

This is a practical report on the “Chiikirikai”, or “Regional Understanding” and “Kokusairikai” or “International Understanding” courses offered at Tokai University in the academic year 2023. These two are introductory courses to confirm the concept of Public Achievement (PA)-style education, which was introduced at Tokai University in the 2018 academic year. The purpose of this report is to systematically summarize and publish the author’s efforts in “Regional Understanding” and “International Understanding” in order to receive various opinions and advice, and to make further improvements based on them, so that as many students as possible can acquire citizenship through these classes.

1 はじめに

本稿は、2023年度秋学期に東海大学で開講された発展教養科目の中の「国際理解」と「地域理解」における実践報告である。この「国際理解」と「地域理解」は、東海大学において2018年度から取り入れられたパブリック・アチーブメント（PA）型教育の概念を確認する導入的役割を持つ科目である。パブリック・アチーブメント（PA）型教育とは、若者が社会参加の経験をととして民主主義社会における市民性（シティズンシップ）を獲得することを目指した教育実践を意味する。東海大学におけるPA型教育の位置づけとしては、「社会の構成員であることを自覚し、社会と関わろうとする、自発的な意識を高め、公共に資する判断と行動が必要なことを認識し、社会の持続的な発展に取り組もうとする人材を輩出する」ことを目指している。本稿は、筆者の「国際理解」と「地域理解」における取り組みを体系的にまとめ、公表することで、さまざまな意見や助言を受け、それらを踏まえて、さらなる改善を重ねて、ひとりでも多くの学生がこれらの授業を通して、市民性を獲得できるようになることを目的とする。

「国際理解」においては、「グローバル社会の現状を理解すること」と「グローバル社会にお

* 東海大学児童教育学部

ける自らのアイデンティティを意識し、多様な他者の理解と共生について考えること」を学修成果目標とし、「地域理解」においては、「地域について理解すること」と「地域の課題を公的な問題として認識し、自らの役割を考えることができること」を学修成果目標としている。これらは、東海大学において開講されている、すべての「国際理解」、「地域理解」における、共通の学修成果目標である。また、授業の枠組みは担当教員によらず共通しているが、授業内で扱う題材や資料等は担当教員に一任されており、各教員が自らの専門分野や知見を活かして授業を展開している。筆者の「国際理解」の授業スケジュールは以下の通りである。

表1 「国際理解」授業スケジュール

第1回	テーマ①：ガイダンス 目的：講義を通じて、発展教養科目の位置づけ、「国際理解」「地域理解」両科目の関連性、それらを併せて学習する意義、「国際理解」の目標、進め方、成績評価の方法等について理解する。 おもな内容：マインドマップ作成、シラバスを使ったガイダンスなど テーマ②：グローバル社会とは 目的：ワークを通じて、自分自身の経験を思い起こしつつ、グローバル社会とのつながりについて考える。 おもな内容：グローバル化に関する動画視聴、クイズ（世界の人口）、「わたしの世界地図」作成（個人ワーク）など
第2回	テーマ：グローバル社会のつながりを知る～わたしと世界 目的：講義やワークを通じて、グローバル社会の現状と、自分自身とのつながりを知る。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、先進国と開発途上国の関係（開発協力、食料安全保障、衣服等の生産拠点）、クイズ（Black Friday、民主主義国と非民主主義国）など
第3回	テーマ：グローバル社会の現状を理解する①～ニュースから世界を読み解く 目的：講義やワークを通じて、グローバル社会の現状について調べ、持続可能な世界の共創へ向けたグローバルな連帯・協働について知る。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、フェアトレード、国際ニュース視聴（安倍・トランプ会談）、新聞について、国際ニュース記事を読む（個人ワーク）など
第4回	テーマ：グローバル社会の現状を理解する②～世界のニュースを広く、深く 目的：講義やワークを通じて、グローバル社会における現状について、自らの言葉で他者に伝えたり、それを聞いたりして、理解を深める。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、調べた国際ニュースの発表（グループワーク）など
第5回	テーマ：「グローバル社会における共生を考える①～異文化理解とは」 目的：講義やワークを通じて、グローバル社会における異文化理解について考える。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、他国・自国文化の例、異文化適応のプロセス、ハイ・ローコンテクスト、非言語コミュニケーションなど
第6回	テーマ：グローバル社会における共生を考える②～多文化共生のために 目的：講義やワークを通じて、グローバル社会の一員としての自らのアイデンティティと、多様な他者との共生・共創について考える。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、日本ではできるけど海外ではできないこと、バーンガ（グループワーク）

第7回	テーマ：授業のまとめとふりかえり～グローバルシティズンとしてのわたし 目的：これまでの授業をふりかえりながら、グローバルシティズンとして多様な他者とともに平和で公正な世界を創造することの課題と可能性について考える。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、各回のふりかえり、国連安保理、クイズ（東海大学の留学生）など
-----	---

筆者の「地域理解」の授業スケジュールは以下の通りである。

表2 「地域理解」授業スケジュール

第1回	テーマ①：ガイダンス 目的：発展教養科目の位置づけ、「地域理解」「国際理解」両科目の関連性、それらを併せて学習する意義、「地域理解」の目標、進め方、成績評価の方法等について理解する。 おもな内容：マインドマップ作成、シラバスを使ったガイダンスなど テーマ②：地域について考える①～わたしの目線から 目的：ワークを通じて、自分自身の生活圏としての「地域」とのつながりについて、経験を思い起こしつつ考える。 おもな内容：「わたしと地域マップ」作成（個人ワーク）、クイズ（最多・最少人口自治体）など
第2回	テーマ：地域について考える②～多様な人々の目線から 目的：講義やワークを通じて、地域に暮らす多様な人々の目線から「地域」について考え、地域を支える「公助」「共助」や地域づくりのポイントについて知りながら、地域の一員としての自分を自覚する。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、新聞記事（東海大生の記事）、自治会活動、地域防災、クイズ（政令指定都市）、地域づくりに関する動画視聴など
第3回	テーマ：SDGsについて知る～世界から地域へ 目的：講義やワークを通じて、SDGsにおける具体的な課題や地域におけるSDGsについて考える。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、シルバー人材センター、SDGsに関する動画視聴、169ターゲット、国内課題例、クイズ（道路案内表示板）など
第4回	テーマ：身の回りのさまざまな課題について知る～教育・保育に着目して 目的：講義やワークを通じて、現代社会における教育・保育に関するさまざまな課題について知り、課題解決の必要性を認識する。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、調べた「自治体SDGs」・「こんなところでSDGs」発表（グループワーク）、地域の教育・保育に関する課題（個人ワーク・グループワーク）など
第5回	テーマ：教育・保育に関する、地域の課題とその解決策について知る 目的：講義やワークを通じて、教育・保育に関する、地域の課題や解決策に関する実際の事例を知り、多様な主体の協同により実践が進むことの重要性を認識する。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、地域の教育・保育に関する課題（具体例）、新聞について、地域の教育・保育に関する取組動画視聴など
第6回	テーマ：教育・保育に関する、地域の課題とその解決策について考える 目的：講義やワークを通じて、教育・保育に関する、地域の課題と解決策について、意見交換をし、考えを深化させる。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、教育・保育に関する動画視聴、地域の教育・保育に関する課題・取組発表（ペアワーク）、クイズ（市章・町章、難読地名）など

第7回	テーマ：授業のまとめとふりかえり～地域において、わたしができること 目的：講義やワークを通じて、全体をふりかえり、地域の課題解決へ向けた取組の重要性と、そこに自分自身が参画する必要性を認識する。 おもな内容：前回・課題のふりかえり、各回のふりかえり、郷土料理、クイズ（ゴミ問題、ふるさと納税、地名ローマ字表記）など
-----	--

教材については、この発展教養科目を管轄するスチューデントアチーブセンターの先生方が作成された教材を使用したり、自ら作成した教材を使って授業を行っている。

筆者が担当する授業は、この発展教養科目に限らず、すべての授業において「大変だけど、おもしろく、ためになる授業」をモットーにして授業を行っている。本稿では、発展教養科目「国際理解」、「地域理解」において、「大変」、「おもしろく」、「ためになる」をキーワードにして、授業を紹介する。なお、本実践報告は、対象となる2023年度秋学期開講の「国際理解」と「地域理解」のクラス（前半・後半）の履修者に対し、授業実施前に、説明と承諾を得ている。

2 大変

授業担当者である筆者は全くそうは感じていないが、学生が提出したレポートに、この「大変」というキーワードが出てくる項目は以下の通りである。

（1）出欠

大学の教務規程で3分の2以上の出席が求められているため、全7回の授業のうち、5回以上出席することは当然であるが、独自のルールとして、出席確認から20分以内を「遅刻」、授業開始から20分以降を「欠席」として扱っている。ただ、この20分以上の遅刻による「欠席」の場合は、たとえ「欠席」でカウントされたとしても、授業を受けるように指導している。これはその日の課題において、授業に出ていないと書けない項目（その日のふりかえり）があるためである。しかし、実際のところ、この20分以上の遅刻による「欠席」はほとんどない。

座席については、次節でも取り上げるが、授業において活発な意見を吸い上げたいため、当初、グループワーク時以外は自由としていた。しかし、出席管理が大変だったため、学生はあまり好まないように思われるが、秋学期後半クラスにおいては、座席を指定している。

（2）双方向授業

筆者が担当する「国際理解」、「地域理解」においては、一方向型の授業ではなく、学生に常に意見を求めながら授業を進めていく双方向型の授業を展開している。そのため、筆者は授業中、常に机間を巡り、学生にマイクを向け、意見を求めている。したがって、授業中に寝たり、他のこと（いわゆる内職やスマホ）ができないため、学生にとって「大変」なのかもしれない。最初の頃は「わかりません」と回答する学生もいるが、間違った回答をしても当然のことであるが、責めることはせず、むしろ褒めながらこの質疑を続けていくと、学生は自ら考え、自分なりの回答をするようになる。

「国際理解」、「地域理解」の双方の授業において重要なキーワードが、「コミュニケーション」である。「国際理解」においては、異文化理解・多文化共生のために、この「コミュニケーション」が求められるし、「地域理解」においても、行政を含めた、さまざまな地域の人たちとの「コミュニケーション」が重要となる。この「コミュニケーション」は一朝一夕に身につくものではないため、日頃の授業から「コミュニケーション」を重視した授業を展開する必要があると考える。もし、大学のすべての授業で、これらの「コミュニケーション」を重視した、インタラクティブな授業が展開できれば、素晴らしい人材を輩出することができるのではないだろうか。

(3) 課題

「国際理解」、「地域理解」とともに定期試験は実施せず、課題による評価を行っている。この課題は全7回、毎回課している。課題の内容は、その日の授業に関連するものや次回授業の予習に該当するものなど、回によって異なる。例えば、「国際理解」においては、日本と開発途上国との関係について授業を行った後の課題で、「フェアトレード」について調べたり、異文化理解の授業の後に、外国人 YouTuber の「日本ではできるけど海外ではできないこと」を視聴して、その内容をまとめたりしている。「地域理解」においても、SDGs の回の課題として、学生が住んでいる（または住んでいた）自治体の SDGs の取り組みについて、各自治体の総合計画を調べさせ、次回、その調べた内容についてグループ発表を行っている。基本的には A4、1枚に収まる程度の内容であるが、提出期限を次回授業日の前々日 23:59 までとしているため、実質、5日＋数時間（授業時限による）の間に作成し、提出しなくてはならない。課題の提示や提出は、すべてオープンソースの e ラーニングプラットフォームである Open LMS (Moodle) で行っている。

また、回によっては、通常課題に加えて、授業内課題を課すこともある。例えば、「国際理解」において、グローバル社会の現状を知るために、新聞の国際ニュースの記事を読み、その記事の要約、その記事の中でわからないこと、その記事を読んで考えたことをまとめる課題を授業内に行う。ちなみに、秋学期前半のクラスでは、BRICS 首脳会議に関する記事を、秋学期後半のクラスでは、イスラエル・パレスチナ情勢をめぐる BRICS 臨時首脳会議に関する記事を取り上げた。そしてその日の課題では、国際ニュースに関する新聞記事を自ら選び、授業内課題と同様に記事をまとめる課題を課している。ひとり暮らしの学生や新聞を購読していない家庭が増えているため、そもそも新聞探しから始まるこの課題は学生にとっては「大変」かもしれない。したがって、新聞はどこで閲覧できるか、どこで購入できるか等の指導も事前に行っている。その中で、大学図書館のデータベース内の新聞記事については学生に大変好評で、「今後も活用したい」という学生は多い。

3 おもしろく

「国際理解」、「地域理解」は、大学1年次に開講されている。したがって、特に春学期などは、100分の授業時間が新生児にとってはとても長く感じるだろう。また、自ら学ぼうという意欲は何らかのきっかけが必要である。この「おもしろい」側面が、このきっかけになればとさまざまな取り組みを行っている。

(1) クイズ

授業のところどころで、息抜きのためのクイズを導入している。例えば、「国際理解」においては、「民主主義国家と非民主主義国家、どちらが多いか?」「東海大学の留学生数は?どこの国や地域から?」「Black Fridayって何?」など、「地域理解」においては、「人口が一番多い市町村は?人口が一番少ない市町村は?」、「案内表示板の〇〇まで×キロはどこまで?」、「この市章はどこの市?」、「この地名、読めますか? (各務原市など)」などである。これらはその日の授業内容とは関わりがないクイズの場合が多いが、それぞれ「国際」や「地域」と関連のあるクイズを学生に出題し、「国際」や「地域」をもっと身近に感じてもらうことをおもな目的として実施している。

また、このクイズについては、授業中だけでなく、課題においても出題している。「国際理解」において、「英国のチャールズ3世が国家元首の国は?」、「英語圏の国では、円周率(3.14159265..)はどのようにして覚えるのか?」等を出題している。これらについては、インターネットで調べれば容易に答えが得られるため、調べることに自体に重きを置いているのではなく、その事実を知り、「へえ〜」と感じてもらいたい、そして「他はどうか」とさらなる学習を自ら行ってもらえたらという思いでこれらのクイズを実施している。

(2) バーンガ (カードゲーム)

ご存じの方も多いかと思うが、多文化共生の難しさを学生に体感させるために、「国際理解」第6回の授業時間のほとんどを使って、バーンガ¹と呼ばれるカードゲームを実施している。ルールを簡単に説明すると、4〜5名のグループを10〜14グループ作り、各グループに、トランプ1組とルールペーパーを渡し、ページワンやUNOに似たルールでカードゲームを行う。ゲーム中やその前後に話すことは一切許されない。勝った者は別のチームに移動し、次のゲームを行う。これを何度も繰り返すのであるが、このカードゲームにおけるルール(実際にはどのカードが一番弱く、どのカードが一番強い)はそれぞれのグループで異なっている。したがって、ゲームに勝って移動した人は、新しいグループではこれまでの自分の常識(ルール)が全く通用しないため、不安な思いや苛立ちを抱くことになる。一方、この新メンバーを受け入れる側も新メンバーが異なるルールだったことは知らないため、ゲームをしていく中で、不審に思ったり、笑ってバカにしたり、中には身振り手振りで親切にルールを説明する人も出てくる。つまり、新メンバーが異国の地を訪れた外国人であり、新メンバーを受け入れる

グループが異国の地のコミュニティメンバーとなって、多文化共生の難しさを体感できるわけである。

本来、このゲームにおいては、学生全員を移動させ、外国人と受け入れる側の両方を体験させたいと思い、時間いっぱいまでこのゲームを続けるのだが、なかなか全員を移動させることはできない。したがって、授業内にこのゲームに関するふりかえりができないため、学生にはその日の課題で「今日はバーンガを行いました、バーンガと多文化共生とを関連付けながら、感じたことや考えたことを書きなさい」という課題を課し、次の授業でその詳細について説明を行っている。

課題作成の段階で、この取り組みの意義を理解する学生が大半であるが、一部には、「おしゃべりしながらやったほうがもっと楽しくなる」とか、「言葉がなくてもカードゲームは楽しめる」といった間違っただけの解釈をする学生もいるが、翌週の説明を聞いてからは、「多文化共生の難しさがよくわかった」とか「外国に行っていないのに、その感覚が味わえるこのバーンガはすごい」等の感想が出てくるため、多文化共生について「楽しみながら」学ぶことができているのではないかと思う。

(3) グループワークのアイスブレイク

発展教養科目においては、複数の学部・学科が混在するクラス編成になっていることが多いため、グループワークを行っても、なかなか打ち解けた状態で、活発な話し合いとまではいかないことが多い。そこで「国際理解」「地域理解」のグループワークにおいては、最初にアイスブレイクを入れている。アイスブレイクとは、本来、氷を解かすことを意味するが、初対面の者同士が会って何かを行う時に、その緊張感を解きほぐすために行うアクティビティのことを指す。これにより、みんなを和ませ、コミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り出すことができる。

筆者の場合、「しりとり自己紹介」²と「共通点探し」³を行っている。「しりとり自己紹介」は、まずグループリーダーが、通常の自己紹介を行い、その次の人は、前の人（リーダー）の名前の最後の文字で始まる自己紹介文を言ってから、学部・学科、氏名等を言って自己紹介を行う。例えば、前の人が「とうかいたろう」の場合、最後の文字「う」で始まる、「うるさいとよく言われます、〇〇学部××学科の△△です。よろしくお願いします」という感じで、全員がこのスタイルで自己紹介を行う。中には緊張のあまり言葉が出なかったり、難しい文字で始まる場合などもあるため、その場合は、グループメンバーに助け舟を出すように指示している。例えば、「け」で始まる自己紹介文が出ない学生に対しては、「けん玉得意?」「ケーキ好き?」等、声をかけてあげるように促す。すると、その回の感想に、「自分は人前で話すことは苦手だが、今日はグループメンバーのおかげでスムーズに話せた」とコメントする学生が出てくる。このことからこのアイスブレイクの効果は絶大であることがわかる。

「しりとり自己紹介」だけでも十分打ち解けることができるが、さらに「共通点探し」を行っている。このゲームでは、お互いに質問をし合って、グループメンバーすべてが同じ答えとなるものを見つけ出すという活動である。「人間」や「東海大生」等、クラス全員に共通する

項目を挙げるグループが出てくるため、「なるべくたくさん」や「なるべく他のグループにはないものを」という条件を提示する。すると今度はなかなか出てこないため、「答えが2つか3つになる質問を考える」ように伝え、「例えば、よく行くコンビニは？」などと例を挙げると、その後は、通常複数の共通項が見つかるケースが多い。これら2つのアイスブレイクを終えると、グループ内の風通しはとてもよくなり、笑顔で、そして楽しそうに本題のグループワークに入っていくことができる。

このようなアイスブレイクは小学校や中学校でやる活動ではないか、大学生に必要なかという批判もあるかもしれない。しかし、実際にやってみた学生は、「いつもは普通の自己紹介だけなのでグループワークはおもしろくないと思っていたが、今回は全く違った」、「アイスブレイクはとてもいい。これから使わせてもらう」、「今までの授業で一番活発に意見交換できた」等の感想が毎回、どのクラスからも出てくるということは、大学生だろうが、大人だろうが、必要な準備運動であるように思われる。

(4) こんなところで SDGs

SDGs については、中学・高校で勉強してきている学生も多い。そこで、筆者の「地域理解」の授業においては、ちょっと異なる角度から SDGs を見てもらい、興味関心を持って、この SDGs を学び、SDGs 達成のための行動を取ってもらいたいという思いを持っている。そのため、「こんなところで SDGs」という切り口でさまざまな活動を紹介している。例えば、これまで廃棄していたバナナを使用したり、包装紙をなくしたバージョンの「東京ばな奈」や、アイドルが持つ情報発信力を活かして、より多くの人に SDGs を波及 (ripple) させるためのアイドルグループ「ココロリップル」等、学生が「え、こんなところでも SDGs ?」とを感じるような例を授業内で複数提示する。その後、その回の課題で、学生にも「こんなところで SDGs」を見つけて、写真を撮ってアップするように指示すると、学生は楽しみながら、JAL や JAXA、築地本願寺等の SDGs の取り組みを調べてくる。

4 ためになる

(1) 「国際理解」における学び

「国際理解」においては、グローバル社会における学生自身と世界とのつながりを認識させるために、①知っている有名人の出身国、②日本の食料自給率が29%以下の食料輸入国、③自分が着ている服の生産国をそれぞれ3か国ずつ(計9か国)を調べてマップを作成するワークを行っている。また、JICAの資料を基に、日本の開発途上国への開発援助についてと開発途上国からの輸入について説明し、日本にとって開発途上国は必要不可欠なパートナーであることを学生に伝えている。こうした国々からの輸入が止まった時、特に食料の輸入がストップした際の食卓の様子(芋中心の食事)は学生にはかなりインパクトを与えており、食料安全保障について考えるきっかけとなっている。この開発途上国に関する学習を終えた回の課題には、フェアトレードとは何か、そのメリット・デメリットは何かを調べさせ、日本でもフェアトレ

ード商品は増えつつあるが、ドイツなどと比較すると、ひとりあたりのフェアトレード商品購入金額は100分の1であり、日本での取り組みがまだまだであることを実感している。

国際ニュースを取り上げる回では、まず新聞について、全国紙と地方紙があること、全国紙には主張の傾向に違いがあることを具体的な例を示しながら説明している。また、販売部数が減っていることや新聞を読む上で知っておきたいこと（一面、版、号、号外、記事の重要度など）を、松林（2016）を参考に上げている。

異文化理解の回には、他国文化の例を、虹の色の違い、動物の鳴き声の違い、riddle (joke)、雑誌広告、CM 等について具体的な例を示しながら、解説を加えている。同時に、異文化理解においては、自国文化についても知っておく必要があるため、日本版クリスマスや日本人と欧米人のちょっとしたやりとりにおけるコミュニケーションギャップ、さらには和（集団）を重視する点などについて触れている。また、異文化適応のプロセスやハイコンテキストやローコンテキストといった言語的コミュニケーション、顔の表情等の非言語コミュニケーションについて取り上げている。

（2）「地域理解」における学び

「地域理解」においては、「地域について理解する」という学修成果目標を達成するために、自治体や地域のさまざまな人々、さらには地域の活動について、できるだけたくさん紹介したいと考えている。自治体に関しては、どのような SDGs の取り組みを行っているか、また、教育・保育の問題に対して、どのような対応を取っているか等を各自自治体の総合計画を中心に学生自らが調べるワークを取り入れている。また、これら以外にも、シルバー人材センター、自治会活動、地域防災、ふるさと納税について、筆者の経験を踏まえた話を授業で行っている。

シルバー人材センターについては、地域にはさまざまな人が生活していることを示す例として取り上げている。最初にセンターの概略を説明し、その後、筆者の母親がこのセンターを活用している例をいくつか挙げ、センターのことをイメージしやすいような情報提供を行っている。

自治会活動については、筆者が今年度、隣組長をやっているため、よりリアルな自治会活動の現状について話すことができる。自治会加入率の低下や役員・運営の担い手不足、そのために起こる執行部の高齢化、さらには前例踏襲が基本となっているため、法律（個人情報保護法）のアップデートが行われていないという現実がある。この話を通じて、学生は「自分も自治会の一構成員である」や「自分も将来そのような役割を果たすことになる」といった意識付けができていないのではないかと思う。

地域防災については、筆者が集中豪雨により被災した際の体験談を元に、ポリタンクの準備や公衆電話の場所の確認等、日頃から防災意識を持つておくことの重要性について授業で話している。また、年に1回行われる、地域の防災訓練についても話し、災害時には若者の手が必要となることや訓練をやっておかなければ被災当日は何も動けない可能性があることなどを話している。

ふるさと納税については、まず概略を説明したのち、クイズ形式で、寄付納入金額ランキング第8号（2024）

グを取り上げている。ふるさと納税についても筆者の経験を元に話すのだが、その日の学生のふりかえりには、「家族がふるさと納税をやっているが、このようなしくみになっていることをはじめて知った」や「自分も社会人になったらやってみたい」といったコメントがあり、学生の興味・関心の高さがうかがえる。

5 その他の試み

Open LMS への課題の提出締切を、次回授業日の前々日23:59にしているのは、提出された課題をすべてチェックし、次回授業の最初に、課題の点数とコメントをつけて返却しているためである。また、クラス全体に紹介したほうがよいと思われるものについては、次回授業の最初にスライドで紹介している。これにより、どのようなレポートを書けばよいのかを学生は理解できるようになっていると思われる。

また、聴覚に障がいがある学生がいるクラスでは、インクルージョン推進室からの依頼文書にあった「スライドの字幕」を PowerPoint や動画で今回初めて出した。この取り組みは当該学生のことを考えると当然のことであるが、この字幕については、留学生にとってもとても有効で、彼らからの評判がとてもよい。今年度は1つのクラスでしか行っていないが、さまざまな学生が授業を受けていることを考えると、この試みはすべてクラスで実施すべきではないだろうか。

6 今後の課題

「国際理解」と「地域理解」の授業担当は今年度で3年目となる。これまでさまざまな試行錯誤を行ってきたが、3年目にしてある程度、授業内容や授業の進め方等が固まりつつある。しかし、授業を終えた学生からの感想等を踏まえ、常に改善を行っていきたいと考えている。例年、学生からの指摘が多い「課題の負担感の軽減」については、次年度から実行することを検討している。そのためには、授業内にワークの時間を作る必要が生じるために、授業内容を精査する必要がある。

また、科目間での連携の必要性を強く感じている。現在は「国際理解」と「地域理解」の担当者が異なるが、筆者は両方の科目を（異なるクラスで）担当しているため、その思いはとても強い。時間割上、同一クラス担当は無理だと思われるため、せめてシラバスで内容を確認してから授業に臨むことを次年度から行いたい。

7 おわりに

本稿では、東海大学の発展教養科目であり、パブリック・アチーブメント（PA）型教育の科目である「国際理解」と「地域理解」における授業の取り組みについて紹介してきた。3年間、これらの科目を担当して感じるのは、これらの科目は1年次に絶対に必要な科目だという

ことである。「国際理解」や「地域理解」で扱う内容について知っているのと知らないのとでは社会に出てから大きな差がつくことは間違いない。おそらくシティズンシップ2科目についても、筆者は担当していないが、学生にとっては必要不可欠な科目となるであろう。これからも「学生には社会に出る前にこのことはぜひ知っておいてもらいたい」という強い思いを持って、今後も「大変だけど、おもしろく、ためになる」授業を学生のために行っていきたいと思う。

引用文献

ハリー・C・ボイト（2020）『民主主義を創り出す—パブリック・アチーブメントの教育—』東海大学出版部。

松林薫（2016）『新聞の正しい読み方』NTT出版。

山田清志（2017）「地域共生社会の実現のために～ Quality of Life（QOL）の向上に資する人材育成～」日経地方創生フォーラム講演資料（『官民連携・地域連携で実現する地方創生 実装に入った地方創生 具体的事例から考える持続可能な経済循環』2017年12月11日（月）日経ホール）。

注

1 原沢伊都夫（2013）『異文化理解入門』研究社 72～73ページ。

2 とちぎ家庭教育支援事業運営協議会『親学習プログラム アレンジ版』栃木県教育委員会 65ページ。

3 田中久夫、森部修（2016）『アイスブレイク & ミニスポートゲーム—楽しく動いてリラックスする70のゲーム』マネジメントアドバイスセンター 22～23ページ。

